

編集室から

設立以来、ロゴマークらしいものとしては、本紙裏（本欄右頁）のイラストを使用してきました。ただ、名刺や封筒などロゴマークとして用いるべきところには使ってきませんでした。

来年、設立15年を迎えるにあたり、弊社のCIを再創造することにしました。それが、右下のシンボルマークです。

青系の色は透き通った志を表し、たおやかな稜線から輝かしい日が昇るイメージに、夢を形にするお手伝いをする私たちの意志：アスリックの漢字表記「明日裡空」を重ねました。さらに、昇りつつある日には、



陰陽を表す太極図の意匠を秘め、ものごとの本質に迫り、歴史を重んずる意思も込めさせて頂きました。また創業以来、掲げさせていただいてきたキャッチフレーズも少し判りやすく「あしたの空に、ビジョンをしめす」とし、起業や産業開発、地域再生計画など、これまでも・これから地域振興・再生への立志をされた方々の願いをビジョンや、事業として形あるものにするお手伝いをするを、改めて宣言することにしました。

これを機会に、これらの思いを盛り込んで、名刺を全く新しいデザインに致しました。新しく出逢った方のみならず、既にお名刺を交換させていただいている方にも、新しい名刺の印象ともども、私どもの業務内容・姿勢についてもご感想をお聞かせいただければと存じます。

ご縁を頂き、日本各地域を元気にしたい。その都度ではなく、持続的に元気の標となるものを、一緒に打ち立てたい。それが我々の望みであり、願いです。

引き続き、宜しく願い致します。（は）

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2010/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2010/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

長 月



能登・薬師の里にて
by hama

寄稿 『私の夢は北海道の町おこし』

東京神田スーパーカエデ 青山 和江

なぜ町おこしをしたいと思ったのか？

私の故郷、新冠（にかつぶ）は日高地方の真ん中。サラブレットで有名な町です。今から二年前、小学校九校のうち七校が廃校になりました。母校も廃校になり、寂しさや悔しさを覚ええました。

その年の冬、母が入院。毎月北海道へ見舞いに通いました。そうしているうち、町の合併がなくなつたと知り新冠が残ることへの喜びと一緒に、将来への不安も残りました。次の夏、母が他界。葬儀に集まってくれた町の人達に包まれながら、思いました。

この町の為に、私が出発することは何だろうか？

沢山の魅力があるこの町に、もつと輝いてもらいたい！！何か役に立てることはないだろうか？

私は新冠が大好きです。私を育ててくれたこの町と、この町の人達に感謝しているのです。それだからこそ町おこしをしたいと考えました。

私の夢を叶えるということは、新冠に住んでいる父の夢も叶えるということですよ。

今年七十歳になる父にはログハウスを建てて民宿をしたいという夢があります。

そのログハウスに使う木材は、冬眠した木を皮つきのまま使います。出来あがったログハウスにゲストが泊まると、春と間違えた木が芽を出し花を咲かせます。なんにもない森の中に生きたログハウス。ドラム缶を切っただけの五右衛門風呂とチヨロチヨロ流れる湧水がある、そんな民宿を父はやりたくて夢見ています。私は考えました。「町の中に父以外にも色々な夢を持つ

っている人がいるはずだ。その人達の夢が叶っていったら、どんなに魅力的な町になるだろう？新冠の人達自身が、やりたいことを実現して毎日幸せに生き生きと輝いていたなら、どんなに素敵な町になるだろう？そんな新冠を訪れた人にもきつと喜んでもらえるはずだ。」と。町の内側と外側で影響しあい、協力しあつて町づくりをしたい！！一人一人の夢を叶えて行くことで町を作っていきたい！！

新冠が輝きだしたら北海道のモデルケースとなり北海道の人達を輝かせていきたい！！

アイデアや方法がなかったり、勇気や行動力が不足している、そんな夢があるはずだ。新冠や北海道が大好きだから、私は役に立ちたい！！

その第一弾として、今年五月十四、十六日に初めてのツアーを実施しました。東京、横浜、能登から参加していただいたメンバーは私を含めて八名。全ての人に百分之百の満足度を感じてもらえるツアーにすることができました。参加者の皆様には本当に感謝しています。私自身も町の新しい発見をして、ますます好きになりました。

この九月の連休十八、二十日に第二回目のツアーを予定しています。

一人から始めた夢だけど、一人では限界があります。一人でもやっていこうと思つていてる夢だけど、沢山のひとと一緒に叶えていくことができたなら、心から幸せです。



【プロフィール】
（あおやま かずえ）
一九七三年五月生まれ。二十六歳まで北海道ではぐくまれました。三十歳でスーパー経営の主人と結婚。

濱のつばき 『ある変革』

ツイッターとか、つばききという言葉を目にする機会が増えた。インターネットの世界では今、コミュニケーション革命が進行している。

それは、わずか百四十字で情報を伝える仕組み。あたかも、街中で情報が流れる電光掲示板を個人が所有して、ネット上に発信しているようなものである。しかも無料でいくらかでも利用できる。

中には、政府の各種委員会の席上から討論の内容をそのまま実況中継風に流されている場合もある。耳目を集めた仕分け会議等、ツイッターで流された内容と、後ほどマスコミが流す内容が余りにも異なっていることが判明して以来、マスコミへの信頼も揺るがし始めている。

かなり早くから登録して眺めては見たものの、一方で、流されている情報は、今何を食べているとか、何処に行くなど、他人にとってはどうでも良いことが殆どである。余程の暇人で無い限り、大勢の人々が流す「今」情報を一々チェックすることに、何故これほど多くの人々が夢中になるのか判らないでいた。

このようなか、ツイッターで商売上手に！などと銘打ったセミナーも開かれていて。ツイッターで予想外の商取引が成立した事例などが登場し、複数書籍化もされている。これらの解説を注視して気づいた事がある。

それは、ツイッターでの成功事例は、常時膨大な情報を発信できる利点を活かし、発信者本人の手柄を売ること、

親近感を産むことができた事に起因していることだった。

物余りの今日、同じ商品ならば、売り手の手柄や、商品に込められた思いを伝える人から手に取りたいと人々が思い始めている。既に十数年来、物語性の無い商品は売れないことを伝え続けてきた。その作り手・売り手の物語がツイッターという新しいネットの仕組みで流れ始めている。

電話やFAXが無い企業は成立しない。が、電話やFAXが売上を伸ばしてくれているわけではない。ツイッターと売上の関係は、本質的にはこれと同じものなのだ。

ツイッターだけではない。ネット上、あるいはIT関連業界では、今まさに革命的な動きが活発化している。これらを駆使できれば、過去特定のグループに握られていた情報が、一気に大衆のものとなり、マスコミ報道、政治や民主主義のあり方までも変革せざるを得ない環境が整えられる可能性もある。

画期的な仕組みが提供されると、それを使って新たな試みが起こるのは必然ともいえる。しかし、商売の本質を見失つていては新しい道具の価値も無い。自らが創造し扱う商品やサービスは、どう世間の役に立つものなのか、自らの存在意義と、作り手・売り手の手柄の魅力は何処にあるのか、自らは人から信用してもらええる考え方や言動を取っているのか…。これらが怪しいようでは、ツイッターなど使おうものなら逆に、たちどころに自らの薄さを見抜かれてしまつてある。政治家・マスコミとて同じことだ。

げに、面白い世の中になってきた。

『 iPad買っちゃいましたのその後 』
(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

iPadを買ってから4カ月過ぎて、ダウンロードしたアプリの数は200本近くになった。そのしかも90%以上は無料のアプリ。無料と言ってもそのクオリティは侮れない。こんなクオリティのアプリが何故無料なのか良く分からない。一体どうやって儲けるようにしているのだろうか？

今のところ、iPadは仕事というより趣味の世界での利用が中心となっている。一応iPad用のワード、エクセル、パワポと言われる。ペーjーズ、ナンバーズ、キーノートは3本全部買って3600円だったので購入した。でもほとんど使っていない。やはりビジネス用の企画書を書く時は、PCじゃないとい今の僕には難しい。

iPadは、電源を入れると瞬時に使えるようになるので、もっぱら朝起きがけのメールチェックと、Web上でのニュースチェックに活用している。新聞を取らなくなり、テレビもほとんど見なくなったが、全く不都合を感じていない。

毎朝大体朝5時半前に起きる。起きてから寝床に寝転びながらメールチェック、Web閲覧、twitterの拾い読みと、約1時間ばかりごろごろしながらiPadを活用している。iPadがチトばかりし重たいのが玉にきずというところ。

iPhoneとiPadを持つようになってから、ポッドキャストにハマっている。ポッドキャストとは、アイポッド向けのブロードキャストの略だそう。ベースはラジオ放送なんだけど、中には映像ものもある。しかも大半が無料。ジャンルもビジネス、アート、コメディ、教育、政治、テクノロジー、etc・・・と多岐にわたっている。

映像ものでは東大の授業が結構充実した内容で豊富にそろっている。アメリカの大学の授業は、ハーバードだろうがMITだろうがほとんど網羅されている。英語が分かるなら、興味があるものは片っ端から見たいのだけど、残念ながらこれはかなわぬ夢。でも東大の授業は、かなりの数をダウンロードした。宇宙論とか量子力学とか心理学とか色々あって結構面白い。

噂によると中国ではiPedというiPadのパチモンが売られているらしい。価格は何と日本円にして9600円。さすがパチモン天国の中国だ。OSはアンドロイドで、十分な機能を持っているようだ。これが日本に入ってきたらバカ売れすると思う。

著作権や特許権の問題で、すぐには日本に入っていないだろうけど、要するに市場価格1万円未満の価格でiPad的なタブレット端末を作ることができることだ。

こんなものが9600円で売られていたら、皆さん衝動買いしませんか？ おそらく、もう間もなくに現実になりますよ。

『 大学生とのお仕事 』
SOS代表 川畠 嘉浩

私は今大学連携支援事業のプロジェクトマネージャーをしています。大学連携とは文科省が主催する助成金事業で、複数の大学を連携させて互いの強み活かした教育プログラムをつくらうというものです。まあ将来的には「増えすぎた大学をどうまとめていくか？」という狙いもありそうですが、私はその某大学間の大学連携で、「地域医療・福祉における問題解決プログラム」というテーマで両学の学生向けに、行政や市民にも参加をさせていただいて地域の問題解決プロセスをカリキュラム化する取組をしております。

その中のプロジェクトのひとつに、神奈川県逗子市を対象とした「逗子をつらつネットプロジェクト」が現在佳境をむかえております。本プロジェクトを簡単に説明すると

- ・逗子市民の総合病院志向が強く、周辺の総合病院と地域医療の棲み分けが進まず
- ・その結果として、かかりつけ医を持つ市民の割合が46%と低い 東京都の平均は70%超
- ・かかりつけ医を持ってもらい医療の役割分担を進めるには、地域医療資源を知ってもらうことが重要
- ・また、高齢化率27%と高齢化が進む逗子市では介護を支える家族の問題が顕在化しており医療と福祉が統合された情報提供が今後重要なキーワード 行政の縦割りから市民目線へという論理展開の基、逗子市民に対して「医療と福祉のワンストップ型情報提供サービス」です。現在大学生約10名とともに、サイトの企画設計から調査企画、施設評価などを行うフィールドワークを進めています。

ここ最近2週間ほどは、20歳前後の大学生達と逗子をかけずり回ったり、取材をしたりと密度の濃い時間を過ごしています。そんな中で“おっ”と思うことが2つありましたので、是非皆さんに共有させていただきます。

(1)「知らないからできない」のではなく「知ればできる」

大学生だから、「仕事ができない」、「何も知らない」なので「任せられない」と決めつけていた私は「いまどきの大学生」という先入観で彼らを見ていました。そんな私の不遜な態度もあってか、プロジェクト開始当初の学生はモチベーションも低く、授業に参加する人数もまばらな状態でした。ですが、お互い時間を共有し、打ち解けていく中でわかったのが「今は知らないだけ」ということでした。彼らはみんな「知りたい」のです。社会がどうなっているのか？働くこととは何なのか？誰を幸せにするための人生なのか？を。私達大人が経験や知識を伝え、彼らの血肉にさせていく役割を放棄してはいけないことを学びました。

(2)信じて任せればものすごいスピードで成長していく

私も10代(20年以上前ですが)のころは「しらせ世代」と言われた世代です。何に対しても無関心で、やる気が見えてこない。それは、今の若い世代に対して言われていることと同じかも知れません。しかし、つい3日前に医療施設への取材申込の電話を学生にさせました。最初は「怖い」、「恥ずかしい」と嫌がってましたが、簡単なトークマニュアルを作ってあげてトライアルさせたところ、順調に取材アポをとっていきました。そこで「その経験を皆に伝えるためのトークスクリプトを作ってみれば？」と促したところ、うれしそうに作り始め、翌日には皆に教えている姿がありました。

時代に関係なく、若者は「だれから頼りにされている」、「任されている」、その結果として「達成感を得られる」ことを求めています。私達もそれを上の世代から教えてもらって今があるのだと思います。

今、私は非常に清々しい気持ちで若いみんなと仕事ができています。

7月末、由布院の山荘むらた無量塔の主の藤林さんの訃報が飛び込んだ。4月にお会いしたときには、体調思わしくないにもかかわらず、自宅の建築のこととその周辺のこれからの計画について目を輝かして話してくれた。その藤林さんが亡くなったのだ。

由布院の名旅館と言えば亀の井別荘、玉の湯が上げられるが、昭和58年に日田から由布院にやってきて喫茶店からはじめて、食事処をやり、平成に入り旅館「山荘無量塔」を建てる。その無量塔が数年後には亀の井別荘、玉の湯と肩を並べる極みの旅館になった。その後、藤林さんは由布院温泉地内だけでなく東京の大分県のアンテナショップ、サービスエリアの飲食施設のプロデュースをしていくことになる。その建築、商品、営業センスは並外れていた。

氏の建築の前では自分が一級建築士であることなんぞ恥ずかしくて言えなかった。

そのセンスの源は？と本人に尋ねたことがある。

*** 20代に喫茶店をやりながら、よく繁盛しているお店を見に行っていた。ちょうどその頃、地方にまでコーヒー専門店というスタイルが広まって、木を生かした雰囲気の良い専門店がいっぱいできた。何でここはこんなに居心地がいいのかなー。

例えば木であってもきれいに削ってあるのではなく荒っぽくノミの跡があったりして、こうした手仕事が生み出す暖かさがあるのかなとか、色にも濃淡があったり、これが目に優しい空間を作るんだなとかいろいろのことを考えた。なんでかなという



ことをいつも考えていた。人それぞれにいろんな見方がある、それもただ一つの見方をするのではなく、あーじゃないかな？こうじゃないかなーとか。それが訓練になっていったと思う。

僕は湯布院に来てからはレストランの仕事を終えて、夜9時半ごろからいつも天井桟敷（亀の井別荘の喫茶）に行っていた。ポケーっと眺めていた。由布院のまちづくりって？リゾートの魅力って？何かなー、それはあの丸テーブル（酒樽の底を利用している）にあるかなと思っていた。まず傷物の古伊万里の鉢がある、それに野の花が投げ入れてある。鉢は一級品じゃない、でも時代はある元禄のいいものだ。その時代のできそこないで、まして傷物でそれほどの価値はない、でもねあれを見立てて丸テーブルに置いて、菜の花を投げ入れてある、あれに由布院のセンスが凝縮されている。そこを囲んで浴衣姿のご夫婦が丹前を羽織って静かに時を楽しんでいる。一方ではまちづくりに熱心な方々が議論をしている。空気がいい、こうした場で時を一緒に過ごせることが楽しみでもある。その出会いの場を天井桟敷はつくったということで、まさにこれがね、由布院の良さと思った。だからこれを僕も実現したいなーと思った。

*** 藤林さんを亡くした由布院のダメージは相当に大きい。

この藤林さんが由布院に来た理由の一つ。

中谷健太郎さんがいるから それだけ。

彼らと同じ場所、同じ時を過ごすことができたことを誇りに思うし、何より藤林さんの喜びだった。

このところの由布院のセンスをリードしてきたのは山荘無量塔の藤林さんだと思う。その姿が今はない。でもきっと氏の魂は皆の胸の中に刻み込まれ、生き続けるだろう。藤林さんだったらどう考えるだろうか？どうするだろうか？また教えて欲しい。合掌

